

---

# 吸血鬼犯罪捜査官 美紅

城島剣騎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

吸血鬼犯罪捜査官 美紅

### 【Nコード】

N1747BA

### 【作者名】

城島剣騎

### 【あらすじ】

近未来…

吸血鬼は世に認められ、人間と吸血鬼はともに手を組んで特殊刑事部隊を組織する。

おつちよこちよいな新米女刑事の主人公とクールなニヒリストが織りなす、はっちゃけ推理ラブコメ。

## 第一章く〜プロローグ〜>

「ちょっと待ちなさいよ！」

はあはあ。

ほんつとに！すばしっこいんだから。

「まさか俺が狙った女が実はおとり捜査をしている吸血鬼の刑事だったとはな。

俺もやきがまわったって事が…。

空中から見ると美形に思ったけどこうして見ると、案外ちんちくりんだな！」

るつつさい！

ちんちくりんで悪かったわね。

でもそんな事、あんたに言われるまでもなく相棒から散々言われているのよ。

別にあんたに認めてもらわなくても、私はこれでも男性からの熱い支持層があるんだから。

「クククク、警察の犬に成り下がった吸血鬼なんぞに俺を捕まえられると思ったか？」

容疑者である伊東 雅人は必死で追いつがる私を嘲笑うと、ヒラリと夜空を舞った。

くつつそう、本当に憎らしい…。

悔しいんだけど私には奴のような飛行能力はない。

しかしせっかく見つけた容疑者を逃がす手はないので、私はパトカーに戻ってニヒリストの相棒と連絡を取ることにした。

「ごめん春樹。

せっかく容疑者らしき男を見つけたのに逃がしちゃった…。」  
さあて…。

どうせ最初に無線から聞こえてくるのは深い深い溜め息。

「はああああ。」

ほら、ね？

緊急時でなければ、ここから長い長いお叱りがあるんだけど。

「いいか！

奴の根城はすでに割れている。

だがな、今の奴は飢えていんだ！

今取り逃がしたら、絶対にまた被害者が生まれるんだ。

だいたいお前は…。」

ブツ…。

まだまだ春樹の長いお説教が続くと踏んだ私は、思わず無線をぶつちしてしまった。

はぁ、そんな事は私だってわかってるつつーの！

私はあんたの知恵を借りたいだけなのに。

ともかく。

今は時間が惜しいので、この街の交通機関の要衝であるサンシャインブリッジを完全閉鎖する事を提案しようと、再び無線のスイッチをいれようとしていた。

吸血鬼にもいくつかの決まり事？

ルール？

ううん、いわば弱点ってやつかしら。

まあ、そんなものがある。

容疑者の伊東 雅人は水に囲まれた埋め立て地などでは、橋を渡らないと目的の場所へ行けないっていう、変な弱点がある。

なので、橋さえ閉鎖してしまったら容疑者は他の場所へは逃れられずその場所から身動き出来ない。

で、春樹のお小言にうんざりしながらも無線を入れる…、予定だったのだけれど。

「くっそおおお！」

ほんの少しここから離れた場所から容疑者の悲鳴が聞こえてきた。私って飛行能力はないんだけど耳だけは良いのよねえ。

ついでに言つと走るスピードも本当はチーターなみなので、私は急いで悲鳴が聞こえた場所までフルスピードで向かった。

「あいたたた。」

ちきしょう、またしても刑事だったのか！

しかも…、女装した男だとお？」

あつはははつ。

なんとも奇想天外な光景に私は思わず爆笑した。

だって…。

だってさあ、あの無愛想で二ヒリストの相棒が完璧なまでの美女に女装してるんだもの。

でも呑気に笑つてばかりもいられない。

癖っ毛で細めのこわあい美女が私を睨んでいるんだもの。

「はあああ。」

きたよきたよお！

相棒名物のお小言タイムっ！

…っと、とりあえず耳は塞いでおこう。

私の耳って吸血鬼だから特殊な動きが出来るの。

なんとっ！

耳たぶだけを動かして耳栓にする事が出来ちゃったりする。

はい、そのサラリーマンの貴方。

便利でしょ？

ね、便利でしょお？

今、とつても羨ましいって思ったでしょお？

でもざあんねん。

これって非売品なんだあ。

つて事であしからず。

「遅い！

何をやるにもするにもお前は遅いんだよ、このアホうは！」

はいはい、お小言は署でゆっくりと聞いたげるから…。

つて、ん？

なんかおかしいような？

…。

まっ、いつかあ。

私って吸血鬼だから人生アバウティーなんだよねえ。

え？

アバウトは吸血鬼とか関係ない、ですって？

まあ！

そんな細かいつつこみしてたら、春樹みたいになっちゃうんだからとまあ、私はくだらない事を口走って春樹のお小言をやり過ごした。そろそろかな？

そろそろかしら？

私は恐る恐る塞いでいた耳を解放してみる。

「とにかく、だ。」

早く容疑者の確保を行え！」

ほっ、お小言タイムはどうやら終わったみたい。

私は春樹に敬礼！などをやっておどけながら、春樹に押さえつけられている容疑者の手を取り、手錠をはめた。

「伊東 雅人。」

婦女連続暴行、及び連続吸血殺人の第一級容疑者として逮捕します！」

なんだかんだ言って、やっぱり春樹って頼りになるよねえ。

格好良いしね。

「美紅。」

署に戻ったら話がある。

たあぁっつぷりな！」

わぁお、前言撤回（汗）

こうして私は相棒とともに容疑者をパトカーに連行し、署に身柄を移した。



## 第一章<AVGH>

西暦5500年…

東京…

近代化が進み、車は運転手を必要としなくなった。

全てのエネルギーは宇宙光発電で賄えるようになった、近未来都市…

だが、いつの時代であろうと人が人として生き続ける限り争いの種は尽きず、今日もまたどこかで悪質な犯罪がまかり通っている。ただ一つの違い…。

それは中世より闇から闇へと密かに生き続け、人類にとっての害悪に他ならなかった吸血鬼と、それを恐れ続けた人間が、医学の発展にともない人工血液を作るのに成功して以降、共存繁栄の道を歩んできたという事実だけではないだろうか。

しかしだからといって共存によって両者に安寧の時を迎えたという訳ではない。

吸血鬼の中には自らの悦楽によって人を襲う醜悪なる吸血鬼もいて、さらには闇ルートで人類の血を金に換える闇ブローカーなるマフィアが絡んだ事件にまで発展する始末…。

やがて事態を重く見た人類吸血鬼連合政府は、警察の組織の一つに吸血鬼専門の犯罪捜査を行うAVGH「アンチ・ヴァンパイア・ガード・オブ・ザ・ヒューマン」、アブジーという組織を結成するに至ったのである。

結局あれから一晩中こっぴどく有り難いお小言を頂いた私は、終わった安堵感で大きな欠伸をした。

私の名前は上条 美紅。

実家は京都なんだけど、私はその潜在能力と実力？をかわれてアブリジー結成のおりに東京に転勤とあいなつた訳。

上条家は平安時代より続く名門の旧華族の家柄でもあり、御先祖様はかつて、あの有名な安倍晴明という陰陽師と死闘を繰り広げたという大妖怪の末裔らしい。

ま、ひらたく言えば日本発祥の和風吸血鬼一族の一つらしいの。

今はルーマニアやトランシルバニアが主体の吸血鬼世界連合に加盟しているんだけどね。

確かに世間一般に見れば、ドラキュラ伯爵とかカーミラ夫人とかのイメージといい、あちらが本家と言われれば反論しても詮無い事だしね。

とまあ、私の自己紹介はこんなものでいいかしら？

あとは…、そうね。

私の家系は16歳になった時点で歳が止まるって事と、本家と違って寿命があるって事ぐらい。

うちの家系で私が知る限り、最も長く生きた長老様「私の曾祖父様ね？」が200歳だったから、それくらいは生きたみたい。

だから永遠に生きれる本家の吸血鬼とは、だいぶ違うわよね。でもね。

良い所だって、沢山あるのよ？

まず女として一番気になるのは結婚とか出産。

本家では基本的に人間と吸血鬼との結婚は御法度ってなってるの。

理由はまあ、いろいろあるんだけどね。

まず第一には、種族の劇的な増加を防ぐ為。

愛する人には自分と同じように長く生きていて欲しい。

そういう気持ちって、人間も吸血鬼も関係ないって思うの。

まあ私の所みたいに感染症のような力を持たない種族は例外として免除されてるけどね。

それと、本家の吸血鬼の女性は人間の男性とは子供をもつける事が

出来ない。

なんたつて本家の人々つてアンデット…。

つまり一度人間として死んで、それから吸血鬼として第二の人生を歩んでいるから。

あんまり言いたくないけど、欧米の本家の女性の中には子供が生まれないのを良い事に、風俗に勤めたり娼婦なんかをやって生計をたてている人もいる…。

でもそういうのって嫌よねえ。

あえて否定はしないけど、私なら人生を出来るだけまっとうに生きたいわ。

第一、好きでもない男性と…その…、あんな事や…こんな…事を…。あんもう！わかるでしょ？

私だつて花の独身女性なんだからあ！

ごほんごほん、うん。

話を本題に戻すね？

吸血鬼世界連合つて組織を紹介しとくね。

貴族と呼ばれる、一部の真祖「吸血鬼の元祖つて言えば良いかしら」は私達種族と一緒に生まれながらの吸血鬼なの。

吸血鬼世界連合の中心は、その真祖が政治や経済の中枢を担っているの。

そして数年に一度、選挙とかもあつて政治家も変わったりする。

まあ人間の世界と違つて党とかはないけど。

吸血鬼の属性を持つ者は、すべからく吸血鬼世界連合に加盟しないと人間達からその存在を認めてもらえないし、当然市民権を取得する事も出来ない。

で、吸血鬼つて属性は世界中に様々あるんだけど、本家と違つて人間との結婚を許される種族もかなりあるし、その趣向も弱点も違いも千差万別だつたりする。

私達なんて燦々と降り注ぐ太陽もへっちゃら！

だつて本家と違つて生きてるんですもの。

寿命があるって以外に目立った弱点もないしね。

それに人間の男性と結ばれて出産だって出来るんだからあ。

そういう人達は吸血鬼世界連合から祝福を受けて、ヴァンピールって称号を授かったりするのよ。

私だって今年で20歳…。

社会人になったばかりでなんだけど、結婚だって知っておきたいから吸血鬼法律辞典を調べて勉強も沢山したの。

こういう知識も、言わばそのお陰だったりする。

ま、ざっとこんな所かしら。

## 第一章<毒舌なる妖刀>

東京…

警視庁刑事部にあるアブジー特務捜査課の一室…

「はあ…。

しつかしなあんでアブジーの私が交通課の要請で交通安全の巡回なんか引つ張り出されなきゃなんないのよお。」

私はかなりぶうたれていた。

何故なら、つい先日凶悪犯罪者であった伊東 雅人の逮捕という大きな功績をおさめ、警視総監賞と非番を頂いたばかりだったのに…。

そう。

私は本来明日は非番だったのだ。

なのに春樹のやつが私に黙って交通課が最も忙しい今の時期に勝手に協力を願いだした為に、私の非番は明後日に延期されてしまった。勿論、春樹も自分の非番を延期して通常勤務はするんだけど。

「フン。」

ちよっとおとり捜査で功績をあげてテレビなんぞに出演させてもらったからって調子にのっていい気になりやがって。

そもそもあれは俺のアシスト…いや、実際に確保したのは俺なのだからな。」

むっかあゝっ！

わかってますよお、だ。

私は思わず舌を出してべゝっ！をしてやった。

こいつ、藤田 春樹。

私が見た目で決めた人間sideの刑事パートナーなんだけど…。

あ、アブジーの規則で捜査官は人間と吸血鬼で一对のパートナーを

組む規則になっている。

人間側からの要請で、吸血鬼だけに犯罪捜査を任せると見識が偏るから、とかなんとか。

まあ、共存といってもこの辺りに私は温度差を感じずにはいられないのよねえ。

で、私とパートナーになった藤田 春樹の話に戻るんだけど。

見た目は中性的で美少年雑誌ジュノンなんかの見出しを飾れるくらいのジャニ顔「ジャニーズ系の顔」だから、署でもその人気は凄く高い。

都内の女子高ではファンクラブなるものまであるらしい。

なのに容姿に相反して性格は可愛くない。

はつきり言って、齒に絹を着せない性格で思った事は言いたい放題！時には重箱の隅をつつくようなマシンガントークもする。

でも悔しい事に彼の言論と論理、そして推理は理路整然としていて無理がなく、しかもそれが正鵠を射てるって感じなのよ、これが。

また、捜査にあたつての戦略や洞察力も半端じゃなく鋭い故に、彼はアブジーでも一目置かれる存在で毒舌なる妖刀という仇名まであるのよ。

でも言い方は本当に冷たいしクールというよりはニヒリストという言葉のが似合う。

見てなさいよお？

いつか必ず春樹より早く出世して、思いっきりこき使ってやるんだからあ！

などと日々企んでいたりする。

だって、だってね？

私はキャリアだけど春樹つてばノンキャリアなのよ。

これは密かな私の優越感。

で、彼は東京の三鷹市にある天然理心流「あの有名な新撰組の主流派ね」って剣術の流派を学んでいるらしくって目録？「っても段や

級じゃないからわかんないけど」でかなりの凄腕らしく、さらには御先祖様をたどれば新撰組三番隊組長の斎藤 一っていう偉い幹部だったらしい。

まあそんな変わった経歴もアブジー勤務の要因なのかもしれないけど。

天使のような美貌の容姿だけどクールで二ヒルな春樹に、私は毎度毎度してやられている。

「ほら、ぼさつとするな。」

とつと給料分の仕事しろよ、このアホう！」

むつかむかあ！

とまあ今更腹を立てたって口で言い負かせる程に私はディベートが得意ではないので、黙って持ち場へ戻る事にした。

やがて今日の激務も終わり、警察署を出た私は毎度恒例の背伸びをした。

「はあ〜っ。」

交通安全なんて私の範疇じゃないのになあ…。

非番がなくなつた訳じゃなくなつて延期になつただけなんだし、まあいつかあ。

春樹…。

私の顔を明日は見れないけど寂しい？」

と、悪戯っぽく私は春樹の顔色を窺い、ぺろつと舌を出して見せた。でも私には彼が次に言う台詞くらいは読めたので、先に言つてやることにした。

「別に。」

「別に…。」

ほう〜ら、ね？

春樹は興味の湧かない話や、どうしても良い事になると、別に。で済ます。

「春樹さあ、もうちょっとリアクションの幅を広げて会話を膨らませようとかないの？」

すると、春樹は大きな深呼吸をしたかと思った次の瞬間、私の髪の毛を引っ張りつつ耳元で怒鳴り声を張り上げた。

「こおのドアホウ！」

お前のお陰で明日は始末書やらなんやらで雑務が山積しているんだ！」

キーン…。

春樹の怒鳴り声のせいで、危うく鼓膜が破れるところだったじゃないのお。

「春樹ねえ、私はこれでも署内で憧れのマドンナって言われてんだからね！」

私みたいな可憐な乙女になんて野蛮な真似するのよお。

レディーに対してもっと優しく出来ない訳？

だから春樹は軽薄なファン以外の女性から敬遠されるんだわ。」

言ってやった。

が、予想に反して春樹はクククツツと可愛くない笑みを浮かべた。

「そんなに聞きたいのか？」

俺の女性関係を。」

うつ…。

そんな魅力的な流し目をしないでよ。

思わずドキツとしちゃったじゃないの、春樹のくせに…。

「べつつにい？」

「べつつに？」

うつ。

こういう大人気ない仕返しがまた悔しい。

## 第一章<短気な王子様>

だから私は黙って帰宅途中にある自動販売機に100円玉を入れ、缶ジュース…。

じゃない人工血液缶のプルを引っ張って、プシュッ！と開けた。ゴクッ。

ああうまい！

私は思わずプハ〜っ！と漏らすと、春樹は呆れ顔で冷たく言った。  
「おやじか。」

だから太るんだよ、お前。」

カッチーン！

あつたまきたあ。

「しっつれいね！

私は吸血鬼なんだから血液の取り過ぎで太ったりなんかしないわよ。人間と一緒にしないでくれない？」

すると、春樹はさらに頭に血が登るような発言をして、私の顔を真っ赤にさせた。

「そうだよな、お前はやっぱり人間と違って化け物なんだよな。」

すっかり忘れてたよ。

おまけにバカだし。

なあ。

吸血鬼が皆、お前みたいなおバカばっかなら世界はとくに滅びてるよな。」

怒り心頭に達した私は、そこから一切口も聞かないまま、リモコンでタクシーを呼びつけて帰宅する事にした。

明後日…

当然と言すべきか、私は朝を放棄して昼寝に突入し、ふて寝を決め込んでいた。

だってさあ。

私ってば仮にも吸血鬼な訳じゃない？

まあ本家の吸血鬼の方々と違って、私は例え夏のように照りつける日中の太陽の下でも普通に活動出来たりするんだけど。

因みに本家では夜にしか活動出来ない為、24時間制の会社に勤務しているか「コンビニとかね」、自由に出勤時間が設定出来る仕事、タイムフレックス制の会社で仕事をしたりしているの。

そんな訳で、私の家系では寿命がある代わりに優遇されてる面もあるのかな？

でも日中と夜とでは、やっぱり夜の方が力が湧いてくるし、本領発揮も出来るのよ。

という事で非番の時は二トリで購入した簡易型棺桶ベッドで快眠を貪っていた。

しかしそんな私のささやかな休養は、いきなり容赦なく鳴り響く一本の電話で破られた！

当然、叩き起こされた寝起きの私としては不愉快極まりない。

「もしもし？」

と私は極めてそつげなく粗暴な電話の対応をした。

私の睡眠の邪魔をする奴なんて、決まって実家からか春樹あたりと相場は決まっているからだ。

「とつとと起きろ！」

一人で起きられないなら、今からお前のマンションまで王子様の目覚めの往復ビンタで叩き起こしに行つてやろうか？」

ほら、ね？

やっぱり春樹だった。

それにしても他に言いようがないのかしら。

多分、春樹だけは絶世の美女が相手でも私と同じ対応をするんだろ  
うなあ。

だからイケメンなのに春樹の性格を知ったら皆、敬遠するのよ。

しかも春樹は冗談を言わない性質なので、本当にやりそうで怖い。

どうせなら、その甘いマスクに似合う起こし方をしてくれたらどんなにか……。

ない！

絶対にない！

あの春樹に限っては絶対にない！

まあ嘆いたってそれが春樹なんだからしょうがない。

「王子様なら、そんな物騒な起こし方なんてしないわよ？」

優しく抱き起こして甘いキスが王道でしょ？」

と私が言つと、春樹は予想通り溜め息と同時に深い深呼吸をはじめた。

さて、受話器を今のうちに離しておかないと、えらい目にあうのよね。

と警戒したのだが、帰ってきた言葉は私の予想外の言葉だった。

「だったら優しくお姫様だつこで抱き起こしてやろうか？」

きゃーっ！

なんて魅惑的な誘惑かしらつて胸をときめかせて油断した瞬間、次の言葉はやっぱり春樹だった。

「こおおのドアホう！」

グダグダ言つてないでとつと来い！

殺すぞ、アホうが！！」

はあーっ。

春樹は間違いなく一生涯独身確定ね。

と言いながらも私は矢継ぎ早に着替えを済ませて署に向かった。

署に到着すると、春樹は待ち構えていたように居丈高に腕を組んで不機嫌な顔をしていた。

「遅い！」

刑事舐めてんのかお前は。

説明は後ですから、とつととパトカーに乗れ！」

車上の人となつた私と春樹を乗せた無人パトカーは、ゆつくりと走りはじめた。

まったく。

到着早々これよ？

こっちは非番だつてのに本当に劳いの言葉すらないんだから…。

とぶうたれていると、エスパー春樹は即座に私の心の声を読み取つたのか、黙つて私の頭に軽い拳骨を入れてきた。

「今から向かうのはファイバー製薬の社長宅だ。

社長は一週間前からストーカー被害を受けているらしい。

しかも…、空からな。」

成る程、だから私達アブジーにお呼びがかかったって事ね。

「で、殺されかけたり誘拐されかかったりつて実際に被害を受けた経歴は？」

というと、春樹はぶつきらばうに報告書類を私の胸の前に差し出した。

つまりこれから先は自分で目を通せつて言いたい訳なのね？

まったく…。

春樹はもう少し親切にするつて事を学ぶべきだわ。

と本人に言つても100倍くらいに跳ね返つてきそうなので、言わないけどね。

「どうやらストーキングされているだけで実害はないみたいね。

でも事件性がないなら、私達の出番なんてないんじゃない？

特に憂慮すべき事態とも思えないんだけど？」

私は事件性もないのに非番の所を呼び出されたの？という忸怩たる思いもあつた為、殊更拗ねた物言いで春樹につつかかった。



## 第一章＜洋館への招待＞

「おおかた警察署内のお偉方と社長の間に、なんらかの繋がり」「コネクションというより賄賂？」があつたりって事じゃないのか？

社長曰く、親愛なるアブジの皆さまへ。

日頃はアブジの皆さまの活躍によって市民は安寧を迎えられています。

いきなり本題を申しますと、わたくしは最近、空からのストーカーなる被害に悩まされております。

ついては日頃、お忙しい激務をこなされているアブジの皆さま。わたくしをガードするお仕事を依頼させて頂きます。

あまりある勤務時間を有用にお使い下さいませ。

無事解決致しました暁には、またお礼に伺いたいと思っています。だ！

つていうか、俺に絡んでくんない！」

まったく。

こういうのを慇懃無礼っていうのかしら？

だいたいお礼を致しますじやなくて伺いますでも、言いたい事は一緒でしょうが！

春樹も普段は饒舌なんだから、こういう時に役に立って欲しいものよね。

と、私は春樹にちらつと横目で視線を投げかけた。

しかし春樹の攻撃を待つまでもなく、ほどなくしてパトカーは社長宅に到着した。

社長宅…

近代化し殆ど全てを機械化した最近の建築物とは対照に、まるで鹿鳴館のような迎賓館を住まいとして改良した洋館に、私と春樹は圧

倒された。

「わあ、なんて素敵な建物かしらあ。

舞踏会とか開催されたら、まるでベルばらの世界よねえ。」

などと私が乙女チックな発言をしたのに、春樹は深い深い溜め息を吐いて冷たい視線を送ってきたかと思えば、やれやれ。と首を横に振った。

「ベルばらって歴史で習ったあの旧時代の漫画だよな？

お前いつから生きてるんだよ。」

春樹ったらわかってないわ。

「どんな時代のもんでも名作って語り継がれるものじゃない？」

と反論したけど、春樹は興味なさげだったので、私もそれ以上は何も言わない事にした。

「しかし…、随分と時代に逆行した洋館だな。

こういう建築に拘る奴は、頭が固くて柔軟な発想が出来ない年寄りが多い。

こいつはどうやら、やっかいな仕事になりそうだ。」

はあ。

この洋館の外観を一目見ただけで、よくそんなひねた見方が出来るものよねえ。

と春樹を見ていたら、春樹は私の首根っこを掴んで強制的に自分から視線をそらせた。

「そんなに物欲しそうな顔で見つめるな。」

なあんですってえ？

と思ったけど春樹は確かに目の保養にはなる。

「良いじゃないの、減るもんじゃなし！」

といってやったら即答してきた。

「いや、減る！」

というか、お前の場合は吸血の感染はないが、見つめられるとバカの感染があるかもしれん。」

むっかあ！

春樹：、いつか殺す！

「で？」

なんか言いたい事があるんだろ。

まさか本当に見惚れていた訳でもあるまい？

ただでさえお前は挙動不審なんだから、これ以上挙動不審な態度をとって俺を困らせるな。」

むうう、本当の本当に春樹は可愛くない！

「どうして洋館の外観を見ただけで、そんな決めつけるような事が言えるのよ。」

私の発言に、春樹は吐き捨てるように言って、それがまた私の気分を害させた。

「刑事のくせにプロファイリングも知らんバカにつける薬はないな。第一、あんな文面を書いた奴に好印象なんぞ持てるか？」

むうう…、それは確かに。

「ぼさつとしてないで中に入るぞ。」

にしても失礼ね。

プロファイリングくらい私だって知ってるわよ！

と言い返してやりたかったが、春樹は私に構わずさっさと呼び鈴を押し、玄關へと入っていったので、私も慌てて後を追った。

「ちよつと待つてよお。」

この洋館が殺人事件の舞台となるとも、その時は知らずに…。

## 第一章＜不協和音＞

川島宅…

そう、アブジーの上層部に直に依頼を要請したファイバー製薬社長の自宅…

玄関で私達を迎えてくれたのは、若くて美しいメイドさん達。

玄関の先は吹き抜けの踊り場になっていて、そこから2階へと向かう螺旋階段がある。

さらに2階の天井から吊るされているのは、まるで本当にベルサイユ宮殿にありそうな荘厳華麗なシャンデリア。

中に入った私達は、まるで歌劇場にでも来たような錯覚を覚えた。

本当に映画のロケに使われてもおかしくないような外観に似つかわしい洋館である。

「あの…、刑事さん達？」

はっ！

あまりにも乙女心をくすぐる中世な洋館に感激していた私は、完全に心酔して浸っていた為、不意にかけられた家人の声で、一気に現実世界へと引き戻された。

「あら、嫌ですわ私とした事が。」

どうか致しまして？」

などと、思わず雰囲気に従って不思議な言葉使いをしたら、春樹から刺すような冷たい視線と厳しい一言を賜った。

「ああ。」

こいつは俺の付録みたいなもんなんぞ、どうかお構いなく。ちよつと浮世離れしていて頭のネジがずれているんですよ。まともに相手をする程の奴じゃないんで。」

怒ってる怒ってる。

にしても…、しっつれいしちゃうわね！

そんな説明じゃまるで私が精神的破綻者みたいじゃないの。

と、私達のやり取りを見比べていたメイドさんが、仕切り直しとばかりに再度お辞儀をした。

「じゃあ、もう一度御挨拶をさせて頂きますね。

私はここの洋館のメイド達を束ねている、中津 久美と申します。

御主人、川島 高次はお二人を応接間にお通ししてとの命を承っていますので、今からご案内をさせて頂きますね。」

メイドって時代錯誤な上、なんとも金持ちが好みそうな趣味よねえ。

まあ、実質は家政婦みたいなものでしょうけどね。

でも、久美さんって清楚で素直そうで従順って雰囲気だから、メイドという仕事をされていて不思議と違和感をおぼえる事はなかった。まあ、肩まで伸びた髪とカチューシャが愛らしい容姿と相まって、女性の私から見ても素敵って思っちゃうもの。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1747ba/>

---

吸血鬼犯罪捜査官 美紅

2012年1月8日01時46分発行